

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	オディッセアス・エリティス「私道」
Author(s)	茂木, 政敏
Citation	プロピレア , 25 : 105 - 108
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048250">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048250</a>
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



オデイツセアス・エリテイス 「私道」

茂木 政敏 訳

1

我が孤独を形づくるものたちをわたしは愛する。何人も近づくな。ここ数年わたしは自分の時間を、消えかかったフレスコ画、古いが口づけする唇の色もいまだ鮮やかなアイコン画、大洋の宝石の入った箱を守る、短い寛衣やキトンを着た女たちとともに過ごしている。何人も近づくな。まるで、我が家のバルコニーで伸びている薄荷や熊葛くまづつらのように、私を保ってくれるこれら強靱にして無垢なるものたちがいないなら、わたしは飢え死にしてみようだろう。現実から遠ければ遠いほど、これらの隠された鼓動には近い。深紅がかった色調に心落

ち着かぬ夜、わたしが目を覚ますのは、市場での商取引で生まれるもののせいではない。ほんとのことをいうと、わたしにはまるでわからない。聞くところでは、ドル相場の急変、インフレーション、政党間の裏取引同様、(真実ではなく偽物の)涙とため息が毎度流行しているという。——悲しいかな。孤独よ、まるで帆船が泥に埋まるように、わたしはおまえに屈服する。そして歳月は流れていく。

わたしは同時に、レバノンとアンゴラで火を放つ者について語れないし、カンボジアとチリとイランで精神をひねくれさせる者について語れない。私たちは皆生きる才を授けられ、彼もその一人だ。別のこと、『私的な用途』についてわたしは語るのだが、それは目が澄むや否やわたしの目を濁らせる。わたしというのは、たとえお粗末なものでも好きになれば、古代の柱頭くらい完璧なものと思ってしまう。

では、信奉に疑念を、運動選手の鍛錬に薬物を、詩人の精神に敗北の甘みを挿入してしまうのは何

なのかな？ 可視で半透明な人生が、他人にはほとんど見えないものになってしまっているのはなぜ、そして何のためか？ 首の向きを変えるのがただの動作ではなく、全宇宙の転回ともいえるというのは何のため、そしてどうしてか？

私たちに残されているわずかばかりのギリシヤに対して、唯一私たちにまだできることは祈ることだ。どんな神か？ ああ、それは数多い。ほとんど国に住む人の数だけいる。地下二メートルとか崩れた壁の上から彼らは私たちを見張っている。鼻はつぶれていたり、腕は切られていたり、外套の古びた緑色がかっていたり、肩が深紅色だったりしながら、ある眼差しがあなたを越えて止まることなく、ただ彼方へと突き進んでいく。彼らは物思いに耽り、打ちひしがれながら、私たちの人生の糸がそうであるように、釣り糸を垂らしている。そして皆が皆、そのさき生き残れるかわからぬ大事変前夜といった雰囲気にいる。

まるで一日目の最中に二日目が見込まれていくかのようだ。こうなっては、人生で重要なこと

を掴み取る前に、縮んでいき、軽くなり、消えていくように見える。そしてあるのは、かろうじて地に足をつけ私たちに歩み寄ってくるが、けつしてたどり着けない花冠をつけた一人の少女だけだ。

日常の関心事からまったく乖離したこうしたヴイジョンは何を象徴しているのか？ もしわたしの解読が正しいなら、それはこんなことを言っている。『人間よ、お前が創られたのになんの理由もない』。むしろこうだ。『人間よ、おまえが創られた理由を正確に言えば、なんら理由もなく生じること、おまえの人生と営為によって証明するためだ。創造全体の完成はこのようにして成し遂げられると証明するためだ』。

これを理解するには、彼方に進むしかない。

## 2

彼方からわたしは帰る。サントリーニ島のイヌサフランの花々がわたしの元に歩み寄り、薔薇と天使たちの金色の光に包まれた美しい没薬モクヤクをもつ

女<sup>レ</sup>たちがわたしのもとに近づいてくる。

道すがら、わたしは黄色の、赤の、栗色の埃をかぶり、八月のキトノス島の海辺で見られるような、岩についている青や深紅の縞模様をつけられる。見ることの悦楽は聞くことの悦楽であり、触れること、考えることの悦楽でもある。というのは、自然は全方向から同時に眺めることもでき、ついには私たち第二の実体と同化することもある。わたしが絵画を信じているのはこのためだ。それらは恩義を示し、実体にも可能性にも変換し——こうした言葉を恐れなければ——不死の雰囲気を与えようと申し出るからだ。

堅固として、確実で、抹消不能な現実、絵画の手に掛かっている。極小な何かに置き換え、それを引きおこして、別な仕方で扱っていた物質から感覚を引き剥がし、より現実に近い、まさにそれと考える世界図を私たち、他者に示す。だが、これは真実だ。ちよつとだけ真つ直ぐに、ちよつとだけ高く、ちよつとだけ赤く、ちよつとだけ黄色く。すると、天国への灯火<sup>シツナル</sup>がわかる人には灯る。この灯火<sup>シツナル</sup>が時には、君の知識でも、生まれつい

ての習性でもなく、それらしい理由もなしに灯るといふのはほんとうだ。そしてきみは密航者のような心持ちで天国にとどまり、ついには経験と知恵を身につけ、問題となつていく媒体は自分ではなく、矛盾と分類できるものだと思はれる。

青春のはじめの数年間、キュビズムとともに私の身におこつたのはこれだ。全てを解き明かす史的唯物論と、その手際の良さにわたしが熱中したのは——当然のことだつたのだらう——わずかな期間ではない。けれども後になつて、わたしがかつてその反証と見てきた幻想とそれは同じになつてしまい、恩寵ならざる人生という考えが嫌でたまらず、ついには現実界のあらゆる果実を断ち、事物の根源的意味とその形而上的帰結のみを人生とする、人類の新たな四旬節を夢想するようになった。

それでは、歴史家がより純粋な唯物論と分類するスコラ哲学がわたしに灯火<sup>シツナル</sup>を灯すなど、どうやってありえるというのか？ だが、あるのだ。あの頃の画家たちの作品に——奇妙なことだが——わたしはまさに自分が求めるものを見いだした。

自然の秘められた物語の純正化された主題。その形相、その構造、思いがけないものだが知られざる幾何学に準拠しているものとの関わり。そして、わたしが考えていた事物。感覚の消費者ではなく、先導者としての。都合のいい資質の剪定職人としてではなく、形質と形成のまさに代弁者としての。

ジョルジュ・ブラック、ファン・グリス、レジエの作品が呈している簡潔と禁欲は（分析の時期が訪れる前は）、わたしの一つの理想を具現化していた。それらが明らかにしているのは、現実を視覚的幻影に返す野心からの離脱であり、対象を構造的真理のうちにとらえ、それを精神によって宇宙的秩序のうちに眺めようという意志である。

そして、ここで間違いなく自問することになるだろう。一体これら全ては何故か？ 話は何を明らかにしているのか？ わたしは答えよう。まず第一に、灯火を信じることだ。それは、頭で考える手順を一足飛びに越え、研究者が何年もかけて自らのうちに明確化し分類するものをすぐさま把握する。第二に、事物への愛は人生の唯物論的概

念となんら関わりはない。第三に、われわれの祖先が「各々感じているように」と呟いたとき考えていたことは、たとえ一部の形相が外見上（わたしはこの語にこだわる）容認しえない不可解さに通じていたとしても、意義がありつづける。そういうものだ。各々感じているように、各々の胸に生じる。

Ὀδυσσεύας Εὐρύτης, «Ἰδιωτικὴ οὐδία»

第一章、第二章抄訳